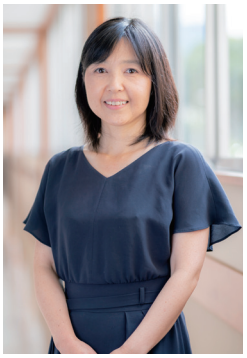
金融教育の現場レポート

山梨県立北杜高等学校
矢崎香織教諭

「高齢者を支える仕組み」の学びが社会と関わる力・人生を設計する力を育む

「金融教育」は社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は、山梨県立北杜（ほくと）高等学校（以下、北杜高校）で家庭科を担当する矢崎香織先生に「高齢者を支える仕組み」の実践授業についてお話をうかがいました。この授業では、年金制度、介護保険、介護サービスの学習を通して、生徒に高齢社会を支える一員であることを自覚させ、そうした仕組みが自分たちの暮らしに果たす役割について考える力を育んでいます。



矢崎香織教諭

地元の企業と商品を開発するプロジェクト「食杜北杜（しょくとほくと）」

雄大な八ヶ岳と甲斐駒ケ岳を仰ぐ北杜高校は、普通科と総合学科を設置する総合制高等学校として２００１年に開校しました。緑豊かな広大な敷地には、設備の整った温室や農場、馬術場を有します。現在の生徒数は約６００名で、総合学科と普通科において各３クラスを各学年で編成しています。普通科と総合学科（総合情報ビジネス、福祉ライフデザイン、生物資源、環境工学）の多様な学びの中で、自分の進路や将来の職業を考えて選択できることが大きな特色です。

２０１８年度から２０１９年度の２年間、金融教育研究校の委嘱を受け、さまざまな形を模索しながら、時に地域と協力して、金融教育に関する授業やイベントなどに取り組みました。その一例として、北杜市の企業と北杜高校の生徒が連携して、地元の食材を生かした商品を開発する地域活性プロジェクト「食杜北杜」があげられます。北杜高校の就職希望者の多くが、地元に就職するという地域との強いつながりを生かしたプロジェクトによって、生徒はリアルな経済活動の中から金融リテラシーの大切さを学びつつ、50以上もの商品を誕生させました。

「高齢者を支える仕組み」を学ぶ意義 自分の経験も余すところなく伝える

２０１３年に北杜高校へ赴任した矢崎先生は、担当する家庭科の科目の中で、「高齢者を支える仕組み」をテーマとした金融教育の実践授業を行っています。北杜高校における家庭科の履修科目は、家庭総合と家庭基礎のほか、選択科目として家庭生活、生活科学Ａ・Ｂ、福祉住環境などがあります。家庭科で金融教育を学ばせることについて、矢崎先生はこ

年金制度の授業の始めに、高齢者に関する身近な話題を投げかける。興味を持ちづらいテーマだからこそ、生徒の関心を引くことが大切

う説明します。

「家庭科では、『生きる』、『働く』、『育児』、『老い』など、さまざまな角度から自分の人生を考え、豊かな生き方を実現させるライフプランを設計できる知識を学びます。これは、まさに金融教育がめざす『生きる力を養う』につながるものです。こうした授業を通して感じるのは、家庭科と金融教育、この二つはとても相性がよいということです」。

矢崎先生が、家庭総合の中で金融教育の実践授業を行うにあたっては、学習指導要領にある「高齢者の自立した生活を支えるための支援の方法や高齢者と関わることの重要性」をベースにします。そのうえで、高齢者を支える仕組みとしての年金制度、介護保険、介護サービスについて学んでいきます。

「これらの授業は、高齢者の経済面と日常生活を支える仕組みを理解させるという、お金に関わる学びが比較的多い内容です。授業の目標を『高齢社会の課題を知り、今後の地域社会の在り方を考える』、『高齢社会を支える地域社会の一員であることを自覚する』として、金融教育がめざす『社会と関わる力の育成』につながればと考えました」。

授業の組立てを考える際、最も苦心したことは、どうすれば生徒が自分事として考えられるかでした、と矢崎先生は語ります。

「核家族化で、高齢者と身近にふれあう機会が少ない生徒たちに対して、50年も先の老後に関するこのテーマを取り上げるにあたり、できるだけ生徒の今後の人生や生活につながるような題材を組み込みました。また、このテーマは、細かい点まで入っていくと膨大な情報量になります。『木を見て森を見ず』といったことにならないように気を付けながら、生徒の興味を引き出し、知識の詰込みではなく、自分事として考えさせる時間を確保するように心がけました」。

そしてもう一つ、矢崎先生が高齢者に関わる授業を行うにあたって、意識して伝えたい思いがあります。矢崎先生は、自身の両親の入院ケアや介護、そして育児を同時期に行うダブルケアの問題に直面したことがありました。当時使えたであろうさまざまな介護の支援制度を知らず、自分で抱え込み過ぎた経験から、「介護者を支援する制度についての知識があれば、もう少し介護の負担は軽かったのではないか」ということを強く感じたと言います。

「生徒に高齢社会の課題を身近に感じてもらうために、介護保険や介護サービスの授業で私の体験談を話すようにしています。老いについて生徒にアンケートをすると、『動けない』、『認知症になる』など、とかくマイナスイメージの回答が多くなりがちですが、老いは誰にでも必

ず訪れます。金融教育の学びの中で、生徒たちが、何歳になっても今が一番幸せとポジティブに考えられることが、『健全なライフプランを作る力』につながると期待しています」。

ICTやワークシート、ロールプレイングを活用して能動的かつ主体的に学ぶ

年金制度、介護保険、介護サービスの3時間から、今回は年金制度の実践授業を紹介します。

①高齢社会に関する生徒の知識をアンケートで確認

まず、高齢者や高齢者を支える仕組みに関する知識が生徒にどれくらいあるのかを、アンケートで確認します。「高齢者は何歳以上?」、「国民年金は何歳から支払う?」、「介護保険は何歳から支払う?」など基礎的な内容の選択式問題の結果を、ICT（パソコンやスマートフォン、電子黒板、インターネットなどの情報通信技術）で可視化し、生徒の理解が十分でないポイントを把握することで、効果的・効率的な授業を行うことが目的です。

「高齢社会を考えるうえで基本的な質問が多いですが、高校生にとってはまだ自分事ではないため、正答率は必ずしも高くありません。例えば、『最初に支払う国民年金の金額』を正解できるのは、大体25％くらい。高齢者になるとどのようなお金がもらえ、そのお金の原資は何なのかといった、経済的な知識がとくに弱い傾向にあるので、じっくり時間をかけて理解を深めるようにしています」。

また、ICTを使ったアンケートを行うことで生徒の言動に思わぬ効果が出ていると、矢崎先生は感じています。

「自分の知識や理解度を生徒自身が認識することで、これから学ぶ内容に興味を持つようです。アンケートは授業の始めに行うこともあり、ICTを活用して結果をクラス全体で共有するため、生徒は他者の意見に触れることになります。そこから、気づきが生まれ、自分の考えを再構築し、多角的な視点を持つきっかけになっていると思います」。

②高齢者を支える仕組みを自分事として具体的に考える

高齢者の定義、老後にどのくらいの費用がかかるのか、高齢者を支える仕組みにはどのようなものがあるのかなどを考えさせます。

「老後の費用を生徒に計算させることで問題意識を高め、その金額についての感想や意見を聞きます。『こんなにお金が必要なの?』、『家が2軒買える』などさまざまな反応がありますが、こうした驚きや発見が、自分の将来を考えるきっかけになっていると感じます」。

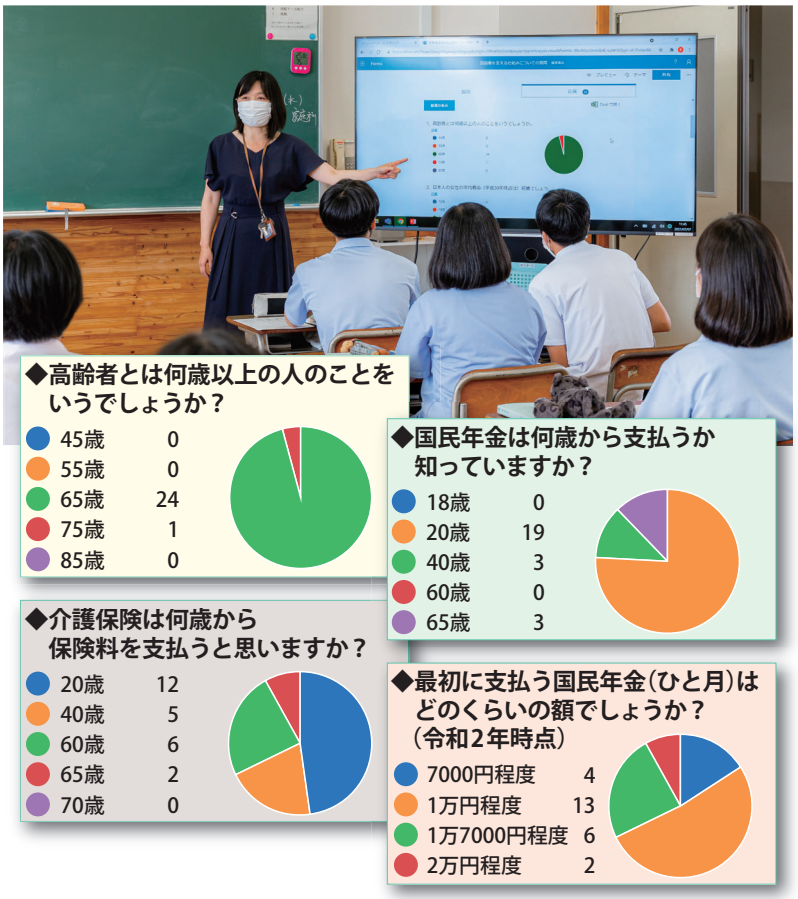
高齢者を支える仕組みについては、大きく年金と介護保険があることを伝えます。

「まず生徒に、どんな老後を送りたいかを聞きます。『少しだけ働きたい』、『旅行に行って楽しく過ごす』といった意見が出ますが、そういった生活をするためには、収入がどれくらい必要なのかを考えさせ、年金制度と介護保険の学習につなげていきます。現役世代が支払っている年金が、高齢者世代を支えていることや、障害年金や遺族年金は高齢者に限らず給付を受けられるといった話をすると、『年金は高齢者だけの制度で自分には関係ない』と考えていた生徒も、興味を持ち出したりします」。

③国民年金と厚生年金の存在を知り違いを理解する

年金には国民年金と厚生年金があり、被保険者の種類や加入条件、納付方法や受給額を学んだうえで、その二つの違いについてグループワークで考えさせます。

「年金制度の具体的な仕組みは、とくに生徒が興味を持ちにくく、自分事とし



ICTを使ってアンケートを行い、結果をその場で確認することで、タイムリーに他者の情報を共有しながら知識や理解度が弱いポイントを把握させる

年金制度の授業の後半、国民年金と厚生年金の違いについてグループで話し合う

グループワーク中、矢崎先生は各班を回り、正解を求めるのではなく、なぜその意見を持ったのか、について考えさせるようにしている

て考えづらい。そのため、単に知識と説明を記載したものではなく、生徒の興味・関心を引きながら、できるだけ自分で考えて答えを見つけ出すワークシートを作成するなど、教材を工夫しました」。

グループワークの意見交換では、正解を求めるのではなく、発言に対してできるだけ肯定的に指導していきます。

「正解のないテーマについて自ら考え、必要に応じて必要な知識を取り出せるスイッチを見い出せるようになればと思っています。就職を考えるタイミングでは、年金のことも併せて考えてほしい。その時になって慌てて考えるのではなく、高校生の今から、考えるための素地を作ってあげたいと思っています。生徒からは『サラリーマンが加入する厚生年金では、配偶者の保険料を払わなくていいのは魅力的』、『自営業者が加入する国民年金は、もらえる年金額は厚生年金より少ないかもしれないけど、自営業者は定年が無いので、より長く働けば豊かに暮らせるのではないか』、『それなら、自分のやりたいようにできるので自分で事業を起こしたい！』、『厚生年金がいいから会社員になる』など、生徒間でさまざまな意見を交わしながら、年金制度を自分事として考え、理解しようとします」。

年金制度の中では、生徒に最も身近に感じてもらいやすい学生納付特例制度についても取り上げ、「奨学金と仕送りで生活していて、国民年金を払う余裕がない専門学校生はどうすればよいか？」というワークシートの設問によって、自分で考えさせるようにします。

「学生納付特例制度の学びでは、本物の申請書に記入させることで、数年後の自分をイメージしてもらうようにしています。このような疑似体験的な学習によって、生徒たちは能動的かつ主体的に学び、学んだことがより記憶に残るように感じます」。

また、年金が給与から控除されていることをよりリアルに感じてもらうべく、給与明細書の見方を金融広報中央委員会が作成した冊子『これであなたもひとり立ち』のワークシートを活用して学ばせます。

④高齢者にとっての公的年金制度の重要性と課題

授業の最後に、高齢者世帯の5割以上が年金だけで生活している現状をワークシートで確認し、年金の重要性を認識させます。

「年金や介護保険の給付金は、世代間扶養によって成り立っていることを学ばせ、自分も高齢社会を支える一員であることを認識させるとともに、少子高齢化など年金制度の問題点についても考えさせます」。

さまざまな教科との連携を通じた効果的な金融教育の推進をめざす

授業後の生徒たちの感想を見ると、「公的年金は、老後の生活の安心としてとても助かるので、きちんと納付しようと思う」、「将来美容室をやりたいと考えているが、国民年金だけでは心配なので、少しずつお金をためていきたい」と言うように、年金を遠い世界のものと感じていた生徒が、自分の進路とつなげるなど自分事として考えられるようになるという変化が見られました。

金融教育の今後の課題について、矢崎先生はこう語ります。

「金融教育は守備範囲の広い学びなので、さまざまな教科や単元とつながりを持たせることが大切だと感じています。同じ年金をテーマにした学習であっても、社会科では財政の仕組みの視点から、数学科では年金受給額のシミュレーションなど、さまざまなアプローチの仕方があります。他の教科の特性を生かしながら、より効果的に金融教育を進めていければと思っています」。